

①タイトル

知的障害児施設における「遊び」の重要性
ー子どもと援助者の関係性に着目してー

②原稿の種類

研究論文

③氏名・所属・会員番号

熊谷 和史 (KUMAGAI Kazufumi) 南寿園 6256

知的障害児施設における「遊び」の重要性

—子どもと援助者の関係性に着目して—

抄 録

本論は、知的障害児施設の生活の中で「遊び」を取り入れることの重要性を提示した。その方法として、利用者と援助者の「通常の援助」と「遊び」のそれぞれの関係性を概説し、比較することで「遊びの本質」とは何かを論じた。通常の援助関係では、援助者側に何かしらの「企て」が存在し、非対称的な関係になりがちであること。しかし、遊びの関係では、日常生活の固定的な役割が一旦棚上げになる等、通常の援助関係とは異なる関係性である事が分かった。

さらに援助者が子どもと遊ぶ場合の姿勢として、①遊びが成立するには誘われた側に決定権があること。②遊びは巻き込まれた中で始まり、釣り合いの取れた形で持続すること。③お互いの了解の基、真剣に行うことで遊びは充実することなどを取り上げ、考察した。このことにより、「遊び」での関わりは、知的障害児への関心をより深めることができる方法であることを提示している。

キーワード

知的障害児施設, 遊び, 援助関係

**Important of playing in the institution for mentally
retarded children**

Aim of the relationship of children and the staff

SUMMARY

投稿依頼により省略

Key Words

Institution for mentally retarded children, Play, Supportive relationship

知的障害児施設における「遊び」の重要性

—子どもと援助者の関係性に着目して—

Important of playing in the institution for mentally retarded children

Aim of the relationship of children and the staff

I. はじめに

遊びをせんと生まれけむ。戯れをせんとや生まれけん。遊ぶ子供の声きけば、わが身さへこそ動かるれ。

この歌は、今から 800 年ほど前に編まれた『梁塵秘抄』の中に納められている(佐佐木 1941)。そして、歌人知らずのこの歌から、中世の庶民による遊びの賛歌が聞こえてくる。古来より大人、子どもにかかわらず、日常生活の中には「遊び」があり、そして遊びの中で誰もが時間を忘れ、分け隔てなく、その時を楽しむ体験をしている。なぜ人は遊ぶのか。一説によると、遊びは人間が生きていく上で重要、あるいは中核的な営みであると言われている(松田 2003)。そして、遊びが人類の文化や創造性を作り出してきたとも言われている(増川 2006)。それだけ、遊びは常に身近なものであり、人間である以上、当然あるいは必要な行為であると見なされてきた。

そして、子どもの創造性を育むには遊びが不可欠であるとの視点で、特に幼児教育の分野で活用されている。しかし、幼児教育で用いられる遊びは、日常にある遊びのように、大人も子供も遊びの中で戯れ、生きる喜びを味わうこと(以下、遊びの本質)、まさに「遊びたいから遊ぶ」ものとは違うとされる。幼児教育での遊びとは教育的目的ため、子供の遊ぶ行為を、援助者は観察・評価し、子供の諸能力を発展させるために用いられる。その一方で、たとえ教育的目的であっても、遊びの本質を理解した上で実践を行う重要性について、主に保育学によって提言されていることについて熊谷(2013)は論じている。

知的障害児施設でも、遊びが活動の中で使われている。しかし、その活動は「そもそも遊びとは何か」が論じられることなく使われていること。そして、保育学での知見を基に、遊びの本質を踏まえた活動のあり方を熊谷(2013)は論じている。例えば、遊びの本質を踏まえた遊びを援助者が行うことによって、知的障害児であっても「遊べる」ことに気づけること。また子供と援助者の関係が「援助する」および「援助される」以外にも人と取り結べることに気づけること。また施設生活の中で「今を楽しむこと」の大切さは遊びの中にあることを論じている。しかし、これはあくまでも援助者側の「気づき」を主眼にしたものであった。そのため、通常的生活援助と遊びの関係はどう違うのか。そして、援助者が子どもとどう関わるのが具体的に遊ぶことになるのか論じられていなかった。

よって、本論では先行研究から遊び以外での援助関係(日常での生活援助など)と遊びの関わりを比較する。この比較によって、援助者がどのような態度や視点で遊びに関わるべきなのかを明示することを目的とする。それは遊びとは何かを知ること、生活援助とは単なる基本的生活習慣の確立のみではないことを援助者は知る契機になると考える。

Ⅱ. 研究方法

西村(1989)は、遊びとは何かの論考の中で、遊び以外の日常生活には「企て」があること。そして遊びは、そうした「企て」とは違った様態を持つことを論じている。この論点を起点に、通常の援助関係には何らかの「企て」があると視点で、その「企て」とはどのようなものかを先行研究から概説する。そして、遊びの関わりとは何かを先行研究から概説する。これらを踏まえ、考察では、施設生活の中で遊ぶことの重要性を通常の援助関係と統合する形で提示する。また、どのように関わるのが遊ぶことと言えるのかを提示する。熊谷(2013)でも論じているが、ことに施設の対象が「知的障害」の「児童」であり、となく教育（療育）的な視点が強く、こうした遊びによる関わりは重要であると考えられる。

本論は文献研究である。文献収集の方法として、最近の遊びや援助関係に関する動向を調べるため、2000年以降の先行研究を国立国会図書館検索システムから、「遊び」「保育」「障害」「施設」「関係」を組み合わせ、絞り込み検索した。また、『社会福祉学』『保育学研究』などの学会誌、(短期)大学紀要の中でも、原著論文・レポート研究のカテゴリーにある文献を中心に抽出した。その上で、国立情報学研究所論文検索システム、秋田大学、東北福祉大学より文献収集した。また収集した文献の中から、特に多く取り上げられている原典については、2000年以前のものも参考にしている。

なお倫理的配慮として、日本社会福祉学会が定める研究倫理指針、特に先行业績引用について遵守する。

Ⅲ. 結果

1. 遊びの意味について

「遊びとは何か」の定義や問いは、論者の数だけあるとも言える(熊谷 2013: 8)。その中で、本論では、特に子どもは、遊びを通じて、周りの出来事を認識し、学習すること。そうした遊びの行為は、仕事や食事などと同様に、人間の基本的な活動であり、日常生活の中にあるとする論が妥当であると考えた(西村 1989)。また、遊びとは何かについて、横井(2006)は、アンリオの遊びの定義を援用し、鬼ごっこなどあきらかに遊びとして(命名)されていること。それが遊ばれていることが客観的に(観察)できること。そして、その行為の主体者の内部的な(態度)で成り立っているとし、一番大切なのは、主体がいかに遊んでいるかの(態度)であると考察している。そして、保育学では、ホイジンガの理論を下敷きに以下の①～④が遊びの行動として共通認識がなされている(田中 2006: 93)。

- ①遊びとは自ら選んで取り組む活動であること(自発性)。
- ②他の目的のためにやるのではなく、遊ぶこと自体が目的となる活動(自己完結性)。
- ③楽しさや喜びといった感情に結びつく活動であること(自己報酬性)。
- ④自ら行動を起こして参加する活動(自己活動性)である。

その意味で、遊びは、やらされている状態では、遊んでいるとは言えない。また、援助者が外部から観察しただけでは、その主体がどのような状態で遊んでいるのかを知ることはできない。遊びを知るとは、子ども達の「遊び込まれている姿」を大切にし、援助者がその中に入り込み、一緒になって遊びの幅を広げていくことである(横井 2008)。このよう

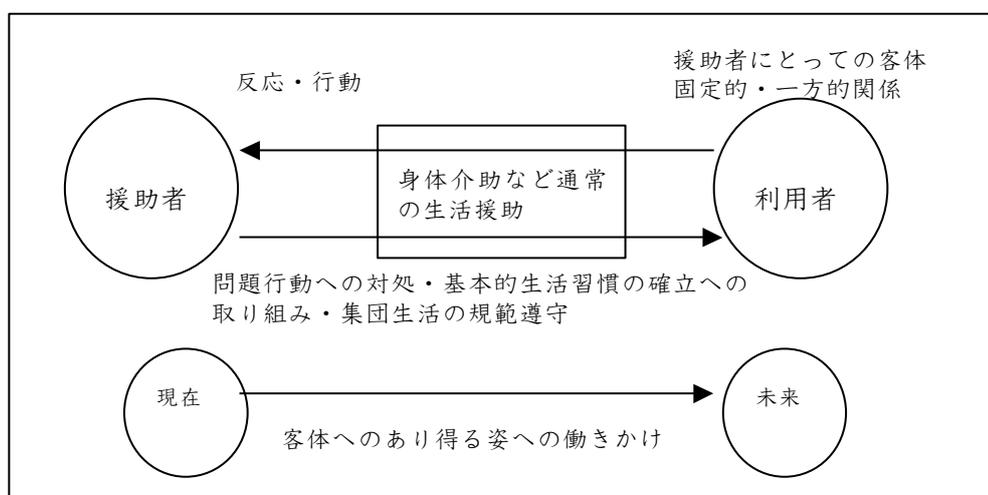
に保育学が遊びを教育の手段としている以上、より良く遊ぶことは良い保育実践につながっていくこととして、遊びとは何かにより深く論考されている（草信 2009，横井 2008）。その事を念頭に、遊びの関係や構造を説明する前に、通常の援助関係とは何かを概説し、その違いについて論じていく。

2. 利用者と援助者の「企て」の関係性

現実生きる我々は、様々な損得勘定の関係下にあり、また未来への準備や何かの目的のために「現在」を生きていると言われる(田中 2006: 97)。そして、自己と他者の関係は、自分が生きるために他者を何らかの意図や目的をもって操作するとされる。それを西村(1989)は、「企ての主体」としての自己と呼ぶ。例えば仕事をする際に、自分の目的のために他者を何かの役割として一方的な視点（まなざし）で固定化する(西村 1989:105-111)。また、日常にある様々な規範(ルール)は、その集団や社会を成り立たせるための企てがあり、この規範によって、他者と自己のあり方を固定化させているといえる（西村 1989:279-287）。つまり、西村(1989)によれば、遊び以外の日常生活には「企て」が常に介在し、自己と他者を固定化しているといえる。

知的障害児施設の利用者と援助者の援助関係に目を転じれば、先行研究でも、この援助者の「企て」が存在し、それが援助者と利用者との間で非対称性を生じさせていると論じられている。本論では、先行研究を踏まえ、

- ①「生活援助」という目的はすでに、援助者(主体)側の「企て」であること。
- ②援助者の専門性発揮は、利用者への一方的なまなざしによってなされていること。
- ③集団生活の維持の中にある規範は援助者と利用者の関係を固定化している。特に、援助者側は利用者に規範を守らせるという役割があるため、その関係はやはり一方的であることについて、図を基に概説をしていく。



資料：筆者作成

図 1 日常の生活援助における関係性

①について、知的障害児施設の援助者の目的は、端的に「自立」を中心とした生活援助である。その「自立」のために、援助者は利用者の中に達成すべき「目標」を見出し、働

きかけていく役割がある。その一方で、自立を促すためには、利用者の自己決定権や主体性の尊重などが考慮される（栗村 2005）¹⁾。しかし、主体性発揮とは、「理性」があることが前提にある（松倉 2001）²⁾。その意味で、知的障害児者は、意思表示が困難であると見なされており、また理性的判断が低い存在とされてきた（堀内 2012）³⁾。そのため、知的障害児者の主体性は、援助者の裁量に委ねられてきたとされる（鈴木 2005：2009）⁴⁾。このことから、健常／障害の区分には、理性／非理性が内在し、理性的に判断できる援助者が、よりよい社会生活へと知的障害児者を導く役割が担われさえていると言える。つまり「援助する」あるいは「援助される」関係は固定されているといえる。

②について、知的障害児施設の役割は、基本的な生活習慣の確立や社会生活に必要な指導や援助となっている（熊谷 2013）。また、問題行動や行動障害への対応は障害の理解、あるいは状況を客観的に把握し、関わるのが専門職として求められている。それは、援助者のまなざしによって利用者のあり方が問われるという意味で一方的であると言える（田中 2008）⁵⁾。

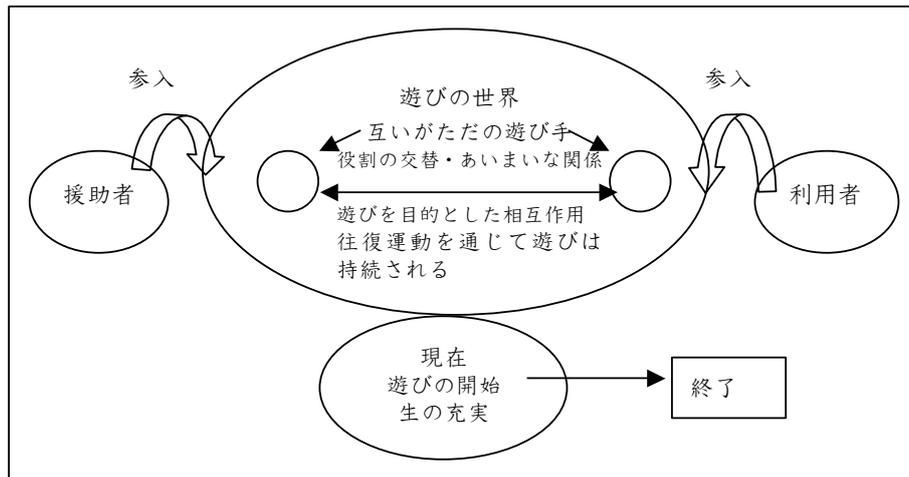
③について、施設は言うなれば集団生活である。そのため、対人間のトラブルやリスクを避け、円滑な生活を営むためには、集団規範を持ち込む必要がある。麦倉(2003)は、日常の会話や援助者の振る舞いの中に、全体の日課に影響が出るかどうかといった判断基準が自己決定やニーズ充足といった他の要素のよりも高いこと。堀内(2008)は、知的障害者の作業所での利用者と援助者との会話の中に、意図するしないに限らず、援助者は規範を守らせる立場としてのメッセージを常に発している事を質的研究により明らかにしている。つまり、利用者と援助者は固定的で非対称的な関係にあるといえる。

なお、図の下にある時間軸で捉えると、援助者は利用者の将来目指すべき自立、次へのステップに向けて、毎日を積み重ねているという意味で、利用者の姿を現在から未来へ投げかけている（投企している）と考えられる。

3. 遊びの関係

遊びの関係とは何か。このことについて、先行研究から、特に遊ぶ当事者の関係で起きている主観的な体験を論じているものを採用した。なお、遊びと一口で言っても範囲が広く、本論では、対人間で行われるもの。大人が子どもを相手に遊ぶことを念頭に、

- ① 遊び以外での関係性との比較で遊びの関係とは何か。
- ② ①を踏まえた上で、遊びの構造とは何か。そして、その構造の中で、当事者たちはどのような作用を受けるのか。
- ③ ②より遊びの世界とはどのようなものなのかについて、図を基に概説をしていく。



資料：筆者作成

図 2 遊びにおける関係性

①においては、Ⅲ-2で論じたように、生活援助など遊び「以外」での関係性は、自分（主体）は相手を（客体）として捉え、なんらかの目的を持ち、働きかける（企てる）関係にあるといえる。こうした関係性は少なからず力関係が常につきまってしまう。しかし、そもそも遊びは、その時をただ「楽しみたい」とする目的のみで始められ関係が取り結ばれる。その意味で、遊び以外での関係では常に非対称であっても、遊ぶとなれば、お互いが「ただの遊び手」となって、その非対称な関係は棚上げにされ、「誘い」「誘われる」といった曖昧な関係になるといえる（柳田 2004）⁶⁾。そして、「誘われた側」が「その遊びをする」と選び取ってはじめて成立するとされる（松浦 2009）。また、遊びの中では、敗者と勝者が存在する場合があるが、それは常に流動的である。そして、敗者と勝者といった関係は、現実の力関係に何ら作用せず、「これは遊び」という暗黙の了解がある。こうしたことから、様々な「しがらみ」は遊びの中では持ち込まれず、もし持ち込まれた途端、それは遊び以外の何かになるといわれている（西村 1989：263-269）⁷⁾。

②では、遊びの世界を持続させるためには、お互いが「やりとり」を繰り返すこと（往還運動とも言う）でもって成立している（横井 2008）⁸⁾。逆に言うと、相手が一方的に勝ち続けたり、明らかに不均衡な状態や力関係では、遊びは持続しない。つまり、ある程度釣り合った均衡が遊びを維持させると言える。または、遊びを維持するためには、お互いが、その遊びへと没入し、集中していくことが挙げられている（山口 2010）。それは、その時を楽しみたいとする相互了解が充実した遊びを作り出すと言える。この遊び手同士の往還運動を支えるのが、その遊びの中にある構造である。それは、ルールあるいは規則とも言われるが、杉谷(2003)はそれをルーティンとして捉えている。これは、どのような遊びでも、手順や終了条件の繰り返し（反復）が入れ子状態に構造化されているという意味である。その構造があって、遊び手が、その中で戯れることが出来ることを示している。なお、遊びのルールは、西村(1989：279-318)によれば、社会一般の道徳とか規範といったものとは違い、その時を楽しむための目的で作られることを明らかにしている。

③については、すでに①と②で概説したように、遊びの世界では、「ただの遊び手」となって、日常の様々なしがらみから一時的に解放されること。それは、固定的な関係に

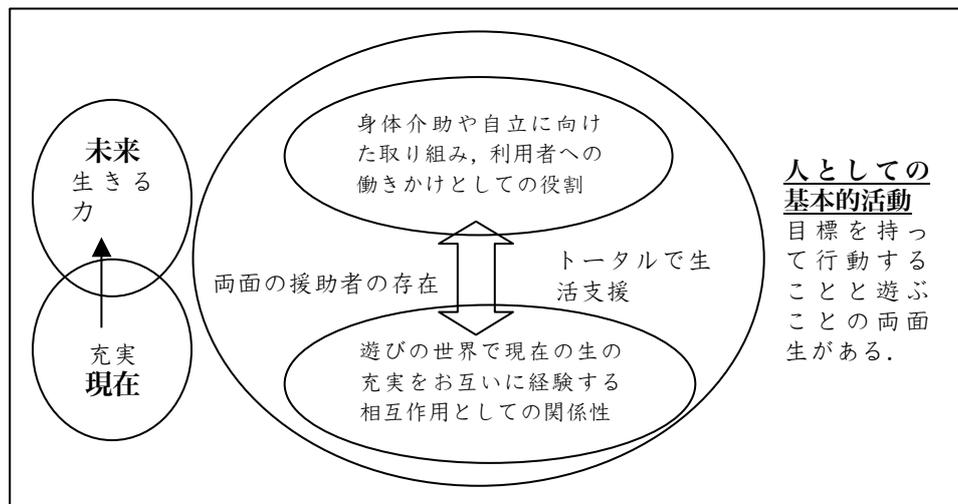
よって安定している自己がゆらぐ体験をすることになる。しかしそこに人としての在りよりの多元性に気づくことができると言える（松田 2003b）。そして、遊びとは、その人が「いまここで生きている」ことを実感する出来事（実存に関わること）であるとされる。

時間軸で捉えると、遊びは常に「現在」にとどまり、未来への指向性はない。あるとすれば、その遊びが終了し、遊び以外の出来事へと移行する。しかし、遊ばれたという事実は、その人に充実感を醸成させ、楽しかったという体験は、遊び以外の動機付けへと繋がる出来事でもある。つまり、遊びは、遊び以外の何かを目的として行われるのではなく、遊ぶために遊ぶことこそが本質であるといえる。

IV. 考察

1. 知的障害児施設における遊びの重要性

Ⅲの研究結果により、通常の援助関係と遊びにおける関係の比較を行った。それらを統合する形で、援助者が子どもと遊びの関係を形成する事の意味について図を基に考察する。



資料：筆者作成

図3 通常の生活援助と遊びの関係による実践の意味

施設あるいは援助者の役割は、子どもの社会性や身辺処理の能力向上、あるいは情緒の安定など細目にわたって検討し、時に医療や教育機関との調整の中で行われることである。このことは、子ども達により良い社会生活を送らせるに必要なことであり、児童福祉の理念、発達権保障にもかなった取り組みである(熊谷 2013)。そうした将来（未来）へ向けた取り組みをする一方で、今を生きることの大切さを実感するためには、「現在が楽しい」と思えることが重要である。その一方法として「遊び」の関係があると考えられる。そして、遊びによる関わりも身辺介助などの関わりも実は、地続きで、どちらも子ども達にとって日常生活の中にある出来事である(西村 1989)⁹⁾。その意味で、子どもと遊びによって関わることは、人としての基本的生活の活動として関わることであり、大きな意味での「生活支援」となると考える。

2. 援助者が遊びとして関わること

現在、遊びの貧困が言われて久しく、健常者であっても、一人遊びやテレビゲームで過ごす時間が多いことが報告されている（堤 2004）。その中で、子どもへ主導的に遊びに誘うことが果たして可能であるのかという疑問もある。先行研究でも、「遊びの体験量」の高低によって、子ども達が遊んでいる事への関わりが違うことが結果として示され、体験量が低い人は、危険回避とか見守りと言った形でしか関われないことが報告されている（福田 2011）。こうしたことから、いかに遊びとして子どもと関わればよいか、これまでの論考の中で提示すると、

- ①誘い手側が遊びを作るのではなく、誘われた側の応答によって成立すること。
- ②遊びは巻き込まれた中で始まり、釣り合いの取れた中で持続されていくこと。
- ③充実した遊びは、「これは遊びである」ことを了解の上で真剣に行うことである。

①については、お互いが遊び手として成立するためには、誘い手（援助者）が、誘う相手が遊びに応じるようなコミュニケーションをとる必要がある。その意味で、誘い手は、どのような遊びが行えるのか。あるいは、その遊びがいかに楽しいのかなど、誘う相手が応じやすい条件を提示しないとイケない。これは、相互の了解、それも子どもの側に選択権があるという意味で、一方的な関係とは全く逆の発想が求められる（松浦 2009）。

②について、援助者と子どもとの遊びの状況を判断し、釣り合いの取れた形で持続させることである。一見、援助者は遊びの外側の視点に立っているように思えるが、ただその子どもと楽しく遊び続けるための加減である。例えば、5歳の子どものキャッチボールをするのに、大人が全力投球すれば、遊びは成立しない。また、それは①の内容と一緒に、子どもが戸惑い、関心を示さない場合、あるいはつまらないと感じているかどうかの内面的な洞察も含まれてくる（横井 2008）。

③について、②に関連するが、遊びを持続させるためには、それなりの真面目さが求められる。遊びはそれ自体が楽しいことだから、勝手に盛りあがると考えることは誤った見方である。特に援助者自身が楽しんでいる姿が、「遊び」に引きつけられることを意識する必要がある（横井 2008, 草信 2009）。

こうした取り組みは、知的障害児施設に限らず、子どもと遊びで関わるあらゆる仕事に言えると考えられる。しかし、知的障害児施設あるいは知的障害などなんらかの障害を持つ子供と関わる際、こうした遊びの視点での関わりが薄いと考える。それだけに、こうした遊びの本質を捉えた関わりは知的障害児（あるいは、障害という範囲を超えた人と関わることの多様さ）への関心をより深めることが出来る方法となりうると考える。

V. 本研究の限界と今後の課題

遊びと仕事の対比で捉えると、どうしても仕事が前景化し、遊びの視点で関わることは後景化になってしまいがちである。そして、遊びは特に意識することなく行われており、いったい遊びとは何かはつかみづらいのが実態である。今回、先行研究を通じ、遊びの関係とは何かを論じることで、遊びの持つ力や重要性をある一定の具体性を持って提示することが出来たと考える。しかし、遊びの世界はそれ以上に奥が深く、「遊びとは何か」は古来

より問われている難問の一つである。今後も、この問いについて、身近な題材を手がかりに論究していきたい。

また、今回は図化する上で、子どもと援助者の関係性をあえて単純化しているが、援助者と利用者の関係はより複雑である。例えば、ケアリングにおける相互浸透性や間主観的な関係も考慮されるべきである（熊谷 2009）。また子どもの置かれている状況や行動が、広範な文脈の中で援助者自身の「学び」として捉えることが必要である（熊谷 2011）。そして、援助者の内面に目をやれば、利用者の不条理に立ちつくし「揺らぐ」体験なども考えると、必ずしも一方的な関係ではあり得ない（小坂 2006）。こうしたことに目配せしながら、今後も利用者と援助者の関係性について考察を深めていきたい。

注

- 1) この他、栗村は自立の水準とは平均的社会人と言ったかなり曖昧なモノであることやマズローの自己実現を引き合いに出しながら、福祉の対象者は常に目の前の生活困難性の解消が第一にあることなどを幅広く論じている。
- 2) ポストモダンソーシャルワークの視点から、当事者は自らのニーズを語るができるのかとする論考の中で、近代のソーシャルワークが理性的人間をモデルにしていることで、判断のできない障害者などは排除されてきたことを指摘している。
- 3) 会話分析を通じて、健常者が知的障害者と話す場合、質問の仕方などに健常者側が無意識のうちに障害者は難しい判断や思考などができない存在であると見なしていることを明らかにしている。
- 4) グループホームや就労支援に携わる援助者は、メンバーの医師をできるだけ尊重しようとするが、最終的には職員の生活とはあるいは自立とは「こうあるべき」とする価値基準が優先されがちであることが質的研究によって明らかにされている。
- 5) 知的障害に限らず、専門家と当事者という関係性は、ナラティブアプローチといった、支配的な言説の解体を志向する援助技術を用いても、一方的で非対称的な関係は解消できないことを論じている。
- 6) 柳田は、西村(1989)の理論を下敷きに、玩具を含み、遊び、遊ばれる関係の曖昧さについて論じている。特に、この曖昧さを消極的に捉えるのではなく、他者と同調することを通じた身体の自然さを提言している。
- 7) 西村は、いじめを持続させるための遊びと、遊びの中にあるからかいは明確に区別するべきであり、いじめという企てが入り込んだ遊びは、もはや遊びではないと断じている。
- 8) この他者と自己の往還について、5才の子どもが園庭で遊ぶ姿を事例として取り上げ、遊び込まれている姿を分析している。
- 9) 例えば、「ひとは、ねたりたべたり、仕事をする。それと同じ現実生活の中で時に人は遊ぶ」（西村 1989：3）のように、人が生きる上で、仕事(企て)も遊びの行動も共に現実生活の中で行われることである。

文 献

- 堀内浩（2012）「会話の中における知的障害者の不利益の提示」『北星学園大学大学院論集』3,69-88.
- 堀内浩（2008）「知的障害者小規模作業所のエスノグラフィー」『北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集』11,27-45.
- 福田真奈（2011）「保育専攻生における幼児期の遊び体験量と遊びへの参加度に関する評価」『白鷗大学論集』25(2),255-275.
- 小坂啓史（2006）「福祉的〈関係性〉と援助の実践」『愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要』9,25-39.
- 熊谷和史（2009）「福祉施設利用者と援助者のケアにおける関係性についての一考察」『東北の社会福祉研究』6,19-35.
- 熊谷和史（2011）「社会福祉実践の実践知とは何か」『東北の社会福祉研究』7,5-19.
- 熊谷和史(2013)「知的障害児施設の子どもと「遊ぶ」ことの有用性」『東北の社会福祉研究』9,7-18.
- 栗村典男（2005）「社会福祉関係下での援助者の理論」『九州大谷研究紀要』31,200-179.
- 草信和世（2009）「現代における保育者の専門性に関する一考察」『保育学研究』47(2),186-195.
- 増川宏一(2006)『遊戯』法政大学出版局.
- 松田恵二(2003)「遊びと学び」『おもちゃと遊びのリアル』173-207, 世界思想社.
- 松田恵示(2003b)「「おもちゃ」とは何かという問い」『おもちゃと遊びのリアル』7-38, 世界思想社.
- 松倉真理子（2001）「社会福祉実践における「他者」の問い」『社会福祉学』42(1),1-11.
- 松浦浩樹(2009)「子どもの遊びの充実と中心性について(2)」『聖学院大学論叢』21(3),89-104.
- 麦倉泰子（2003）「語られる施設化」『年報社会学論集』(16),187-199,関東社会学会.
- 西村清和（1989）『遊びの現象学』勁草書房.
- 佐佐木信綱(1941)『梁塵秘抄』岩波文庫
- 杉谷修一（2003）「遊びにおけるルーティンの構成」『西南女学院大学紀要』7,82-89.
- 鈴木良（2005）「施設 A における知的障害者の地域移行後の自己決定支援について」『社会福祉学』45(3),43-52.
- 鈴木良（2009）「グループホームにおける知的障害者・世話人・職員の相互行為に関わる一考察」『社会福祉学』50(1),68-81.
- 田中淳子（2008）「「語る一聞く」関係が成立することへの懐疑」『社会問題研究』57(2),79-99,大阪府立大学.
- 田中裕喜(2006)「遊びの哲学」『滋賀大学教育学部紀要(教育科学)』56, 93-98.
- 堤荘祐(2004)「子どもの遊びとその保障」『福祉臨床学紀要』1,43-48,神戸親和女子大学.
- 山口裕貴（2010）「ホイジンガ遊戯論にみる「遊ぶ主体」の意味するもの」『紀要』46,215-221,郡山女子大学.
- 柳田泰典(2004)「子どもの遊びとエンパワメント」『長崎大学教育学部紀要.教育科学』66,25-39.

横井紘子(2006)「保育における『遊び』の捉えについての一考察」『保育学研究』44(2),93-103.

横井紘子(2008)「『遊び』の充実』を志向する保育者のありよう」『人間文化創成科学論集』
11,247-257,8 お茶の水女子大学.